

J A施設からの 廃棄物で着火剤

東近江市の
非営利団体

【滋賀・グリーン近江】

J Aグリーン近江は、カントリーエレベーターやライスセンターから出るもみ殻と、メモリアルホールや他社葬祭施設などの廃棄物ろそくを、東近江市の非営利団体「TEAM、CHAKKA」に提供して喜ばれている。キャンプ場などで使う着火剤の材料として、エコと福祉に二役を担っている。

同団体は、地域の若者

の就労支援などを目的に、例農家の西村俊昭代表ら、企業や特定非営利活動法人（NPO法人）の代表者らが昨年設立した。着火剤は地域で就労を目指す若者7人が、毎週火・木曜日製作用している。6月に商品化し、キャンプ場などで販売。今後はホームセンターなどにも置く予定だ。

着火剤は、もみ殻を炭にし、ろを混ぜて固めたもの。同団体の浅井智久氏は「1人ではできない作業。各自が役割を感じながら仕事をしている」と話した。1日に2500個程度製作でき、1個当たり、ろそく40g、炭灰20gを使う。西村氏は「J Aなど資材の提供場と売り場がつながり、若者の働きたい気持ちに応援できる。エコにもなるし、廃棄物

その提供団体を今後
も募っていく」と話した。